

孤獨的受容——戰爭體制下龍瑛宗對橫光利一的受容

謝惠貞

文藻外語大學日本語文系專案助理教授

摘要

拙論旨在驗證由 1936 年《改造》的懸賞小說〈植有木瓜樹的小鎮〉獲得《改造》的年度小說佳作獎的龍瑛宗如何接受橫光利一。具體而言，去究明〈邂逅〉（《文藝台灣》，1941 .3）中，挪用的橫光利一〈頭與腹〉之處，並進行細部比對。其模作作品的真意，在於對於土曜人的批判，以及說明龍對於新台灣文化之創造的呼籲。再者，通過聚焦於「近代的超克」這個戰時下的言論，並透過驗檢證龍瑛宗以隨筆〈拿破崙與橫光利一〉批評的橫光的小說〈拿破崙與金錢癩〉，分析對於寫實主義文學和浪漫主義文學的龍瑛宗文學觀所呈現的搖擺。作為社會主義的寫實主義被概括認識的日本統治期台灣的寫實主義研究脈絡上，無法充分解釋的這二個龍瑛宗的文本，我想可以歸結為殖民地文學的矛盾。

關鍵詞：〈邂逅〉、〈拿破崙與橫光利一〉、〈頭與腹〉、殖民地擬態、敘事學

**Solitary Acceptance:
Lung Ying-Tsung's Acceptance of Yokomitsu Riichi in
Wartime**

Xie Hui-Zhen

Project Assistant Professor, Department of Japanese Language,
Wenzao Ursuline University of Languages

Abstract

This article investigates Lung Ying-Tsung's 龍瑛宗 acceptance of Yokomitsu Riichi 橫光利一—Lung is the one who received an honorable mention with “A Town with Papaya Trees” in *Restructuring's* 1936 novel competition. To be specific, this article reveals the traces of Lung's imitation of Yokomitsu's representative work “Head and Belly” in Lung's “Encounter,” *Literature Taiwan*, March 1941. The real intention of this parody is a defense against Saturday Man's criticism and a call for creating a new Taiwanese culture. This article also pays attention to the statement in wartime “Overcoming Modernity” and examines “Napoleon and Ringworm,” the novel of Yokomitsu that Lung criticized in his essay “Napoleon and Yokomitsu Riichi.” In doing so, it exhibits Lung's wavering of literary views when he faced realistic literature and romantic literature. The realisms in Taiwan during the Japanese occupation period are usually viewed together as socialist realism but socialist realism cannot fully explain these two texts. This should result in further ambivalence in colonial literature.

Keywords: “The Encounter,” “Napoleon and Yokomitsu Riichi,” “Head and Belly,” colonial mimicry, narratology

孤独な受容——戦時下における龍瑛宗による横光利一の受容

謝惠貞

文藻外語大学日本語文系専案助理教授

要旨

小論は1936年『改造』の懸賞小説に「パイパイのある街」で佳作入選した龍瑛宗による横光利一受容を検証する。具体的には、「邂逅」（『文芸台湾』、1941.3）で横光利一の代表作「頭ならびに腹」を模倣した痕跡を明らかにした。そのパロディの真意は、土曜人の批判への弁明と龍の新しい台湾の文化創造の呼びかけにある。また、「近代の超克」という戦時下の言説に着目し、龍瑛宗が随筆「ナポレオンと横光利一」で批判した横光の小説「ナポレオンと田虫」を検証することによって、リアリズム文学とロマンチズム文学に対する龍の文学観の揺れが浮かび上がる。社会主義的リアリズムとして一括りにされている日本統治期台湾におけるリアリズムでは解釈しきれないこの二つのテキストは、さらなる植民地文学のアンビヴァレンスに帰結できよう。

キーワード：「邂逅」、「ナポレオンと横光利一」、「頭ならびに腹」、植民地的擬態、物語論

孤独な受容——戦時下における龍瑛宗による横光利一の受容

謝惠貞

文藻外語大学日本語文系専案助理教授

1. はじめに 龍瑛宗による横光利一の受容

龍瑛宗（1911-1999）文学には新感覚派らしき表現が見受けられると指摘されている。例えば、羅成純「龍瑛宗研究」でも新感覚派との関連性を論じている¹。また、葉石濤は「日本統治期にもっとも世界的スケールを有する作家」²だと、龍を高く評価した。

先行研究での台湾における横光利一の受容は印象批評に留まるものが多い。本稿は、巫永福・翁鬧・劉炳鷗と横光利一との新感覚派文学継承の系譜に対する考察を基礎に、1936年『改造』の懸賞小説に「パイヤのある街」で佳作入選した龍瑛宗による受容を検証する。具体的には、「邂逅」（『文芸台湾』、1941.3）で横光利一の代表作「頭ならびに腹」を模倣した痕跡を明らかにしたい。また、横光と龍の両者が参加した「大東亜文学者大会」前後の時代背景を検証し、龍瑛宗が「ナポレオンと横光利一」（『孤独な蠹魚』1943.12、盛興出版部）で批判した横光利一小説「ナポレオンと田虫」を分析し、龍の文学観を明らかにしたい。

それでは、実際、その受容はいかなるものであろうか。もちろん、雑誌新聞などの閲覧もルートの一つだが、王惠珍研究『戦鼓聲中的殖民地書寫 作家龍瑛宗的文学軌跡』（国立台湾大学出版中心、2014.6）が明らかにしたように、台湾文学館所蔵の龍瑛宗文庫に円本が存在している。だが、実際所蔵されている円本の『現代日本文学全集』（1926.12～1931.12、改造社）の12冊には横光利一集が入

¹羅成純（1991）「龍瑛宗研究」、龍瑛宗著、張恆豪編『龍瑛宗集』（台北：前衛）に収録、233頁。

²葉石濤（1987）「論龍瑛宗的客家情節」、『杜甫在長安』、台北：聯經、4頁。

っておらず、該当文庫には『新日本文学全集（第1巻）横光利一集』（1940.3、改造社）が入っている。

ところが、台湾における日本語理解者数が37.8%³の1937年に「パイヤのある街」でデビューした龍の、その日本語力は果たして十分に自由な創作活動に達したのであろうか。

かつて龍は「熱帯の椅子」で「本島人の作家たちときたら、言葉に飢え、技術に飢え、精神に飢えてゐる乞食どもである」⁴と述べている。つまり、日本語は龍にとって「借り物」であり、日本語で創作することは、すなわち読者（受容者）から作者（発信者）への転身と重なり、また台湾の同時代読者・評者の「期待の地平」と交渉しつつ、独自の民族観により、独自の文学観を形成する過程でもある。それが日本内地で発生した近代文学や横光が歩んだ道筋と異なり、クレオール性に富む新たな系譜を成しているはずである。

それらの作品については、Homi Bhabha の「植民地的擬態(Colonial mimicry)」の概念を念頭に、植民地文学がいかにか創造的に日本語及び日本文学を受容し、民族的主体性を構築したかを分析する。また、戦時下の植民地の状況を考慮し、語りの微妙なニュアンスを物語論の分析法⁵を用いて検討したい。

2. 「邂逅」における横光「頭ならびに腹」のパロディ

陳建忠が指摘したように、龍は「パイヤのある街」や「黄家」（『文芸』8巻11号、1940.11）などの小説において、日本語を通して教養を身につけ、台湾での境地から脱出しようとし、近代即ち進歩だと信じる知識人を描いている⁶。それらは当時の資本主義を批判

³ 藤井省三著、張季琳訳（2004）「「大東亞戦争」时期的台湾皇民文学」、『台湾文学這一百年』、台北：麥田、46頁。

⁴ 龍瑛宗（1941.4）「熱帯の椅子」『文芸首都』9巻3号。但し、龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第五冊』、台南：国立台湾文学館、129頁による。

⁵ ジェラルド・プリンス著、遠藤健一訳（1996）『物語論の位相—物語の形式と機能』（東京：松柏社）や日本語の特徴に適應した研究、糸井道浩・高橋亨編（1992）『物語の方法—語りの意味論』（京都：世界思想社）、と藤井貞和（2004）『物語理論講義』（東京：東京大学出版会）などを参照。

⁶ 陳建忠（2004）「尋找熱帶的椅子—論龍瑛宗一九四〇年の小説」、『日據時期台湾

するリアリズム文学と異なる性格を持っている。陳芳明の言葉を借りれば「虚無の自然主義」⁷という描写が多い。

その一方で、『龍瑛宗全集日本語版』の出版に当たって、「フランスとロシアのリアリズムと自然主義、モダニズム、日本新感覚派、シュールレアリズムなどの世界文芸思潮」⁸を受容したとも評されている。

これまで龍が日本新感覚派を代表する横光の「頭ならびに腹」を模倣したことは漠然と指摘されてきたが、いまだにテキスト間の類似の意味が究明されていない。次は具体例を示しながら論じたい。

まず、「邂逅」とはどういった物語なのであろうか。「邂逅」では、龍本人を思わせる劉石虎が、汽車で紳士楊名声に出会い、「台湾の文豪」と揶揄されながらも、共に台湾の文化の有無について議論を交わした。楊が卑俗の現状を批判するのに対して、劉が文学者として新文化の創生に寄与したいと述べた。給仕階級から脱するために、小説賞を取得した劉に対して、台湾の知識人に酷評されるという裏腹な結果になってしまった。

表現面においては、横光「頭ならびに腹」冒頭の名文を模した箇所が4箇所指摘できる。

まずは、横光の「特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてみた。」⁹という表現は、「邂逅」では「傷つけられた獣のやうな叫声をはりあげて、汽車は灰いろの鬣をふり乱しながら、煤けた顔つきで躍りこんできた（197頁）」¹⁰と変身し、近代化の象徴である汽車の擬人化を行っている。

次に、横光の「沿線の小駅は石のように黙殺された（396頁）」という独創的な表現は、「邂逅」では「汽車は板橋を見むきもしないで

作家論－現代性本土性殖民性』、台北：五南図書、198頁。

⁷陳芳明（2011）『台灣新文學史上』台北：聯經、173頁。

⁸翁翠萍「台灣客籍作家龍瑛宗全集日文卷新書發表」『大紀元』、2008.6.27。
<http://www.epochtimes.com/b5/8/6/27/n2171122.htm>（2014.03.16確認）

⁹横光利一（1924.10）「頭ならびに腹」『文芸時代』1巻1号。但し、横光利一著、保昌正夫ほか編（1987）『定本横光利一全集』、東京：河出書房新社、396頁より引用。以下の「頭ならびに腹」の引用は頁数のみ示す。

¹⁰龍瑛宗（1941.3）「邂逅」『文芸台湾』2巻1号。但し、龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第一冊』、台南：国立台湾文学館、197頁より引用。以下の「邂逅」の引用は頁数のみ示す。

駈けすぎた (202 頁)」や「汽車は『翼ある馬』のやうに飛んだ。新竹市を跳び越え、竹南街をすぎてしまった (208 頁)」と、言葉を変えながら再現されている。

他方、近代化しきれていない庶民の道德観の低さを席を譲ってもらえないマイノリティにたとえ、「そこにはあらゆる美德や謙譲は老人や女、子供とともにふり落されてしまった (197 頁)」で表現し、人間を擬物化してみせた。抽象概念と人間を共に擬物化して風刺する構図についても、「頭ならびに腹」での「この運命観が宙に迷った人々の頭の中を流れ出すと、彼等集団は初めて波のやうに崩れ出した。(399 頁)」という表現とは同工異曲の妙を得ている。

また、「頭ならびに腹」での紳士と子僧の対立も再現されている。横光「頭ならびに腹」の梗概は以下の通りである。線路の故障に遭遇した際、「巨万の富と一世の自信とを抱蔵してゐる」紳士の後に「乗客」が従い、別の列車に乗りかえた。それに対して、子僧は「大胆不敵」の振る舞いをして、間もなく開通した線路を、一人列車で走って行く。この作品の研究史を振り返ってみれば、「紳士」と「子僧」の対立の構図がよく議論されていることが分かるだろう¹¹。

龍は、この構図における子僧を給仕だった文豪に変えながら、「給仕文豪」劉石虎と「紳士」楊名声の対比に援用している。

紳士は一無理矢理にわりこませてなかへ這入らうとしてゐた。

……名前を言ひ忘れたが楊名声といふ一突然大きい、剽軽な声で「やあ、これはめずらしい、台湾の文豪一」と叫んだ。……しかしながら、楊名声の内心は小説家を軽蔑してゐた。(198-203 頁)

楊名声の紳士ぶりと、以下のような子僧風の劉石虎の風貌と造形は二分されている。

¹¹ 山崎国紀 (2002) は、「頭ならびに腹」の項目を解説する際に、「多くの乗客たち」、それに「腹をつき出した金鎖りの紳士」、「ひとり残った子僧」、これらの組み合わせは何を意味するのか」がその「研究展望」として取り上げている。井上謙ほか編 (2002) 『横光利一事典』、東京：おうふう、66 頁。

劉石虎は見かけは糞真面目な勤勉さうな青年であるが、ほんとは、怠け者で体裁を繕うことが上手なので、……劉石虎が田舎庄役場の給仕という境遇から逃れるために、「パイナップル村」を書いた。名声と金銭を欲するために夢遊病者のやうに書きまくった。奇跡があらはれた。佳作に入ったのである。(200-201 頁)

劉が登場するこの最初の場面では、「頭ならびに腹」冒頭にある、「一人の横着そうな子僧 (396 頁)」が、「大声で唄い出した (396 頁)」ら、「人々は笑ひ出 (397 頁)」すという人物設定を彷彿させる。一見怠けて横着そうな者が、最初は注目を集めていた。

一方、劉という作中人物の経歴は、容易に作者龍瑛宗のパロディだと判断できる。龍の受賞歴を考えれば、自らの受賞のパロディであることが分かる。また、劉石虎がお正月の列車に乗る理由が文芸雑誌『文学孤島』の新春号に小説を書けと勧められたからだという設定も、「邂逅」が『文芸台湾』 1941 年の 2 巻 1 号に掲載された経緯を示唆していると考えられる。これは小説という体裁を取りながら、随筆のように作者と作中人物の同一性を共示しており、『物語論の位相』で定義したメタ物語的手法として考えてよかろう。

メタ物語的記号はまた、語り手やその聞き手、さらに両者の関係を規定するのに役立つこともある。第一に、語り手のメタ物語的記号の解説の数や種類や複雑性の度合いが、語り手を尊大にしたり謙虚にしたり、……いろいろさせることができる。第二にこのような解説の存在自体が、まさに聞き手が何者であるかの情報を構成した挙げ句、当の物語の重要な特質を際立たせることにもなるのである。¹²

¹² ジェラルド・プリンス著、遠藤健一訳 (1996) 『物語論の位相—物語の形式と機能』、東京：松柏社、144 頁。

それならば、以下の件も、実際龍本人に起きたことから小説の意図を解釈するヒントが求められよう。

ある勇敢な某氏は、某新聞の文芸欄で「パイナップル村」の批評を試み、御丁寧にも「佳作推薦」といふサブタイトルを附し、その作品の出現は、いかなる意味においても台湾の名誉にならないことを多角的に検討して……彼（劉石虎：筆者注）を侮辱の底に蹴とばした。（200頁）

この部分は、龍の「パパイヤのある街」の佳作入選後、『台湾新文学』での土曜人による「歪められたインテリ台湾人の生活を描写したこのかなりの力作は暗さを暗さとしてある程度肯定してゐるやうな作者の態度、素朴の中に妙に小説的構成を意識してゐる点、贅し難い要素を念^{ママ}んでゐる」¹³という批判を意識していると推察できる。

楊逵が創刊した台湾人のための『台湾新文学』に掲載されたこの批判に対して、西川満が主宰する主に日本人が寄稿する『文芸台湾』において龍が応じている。このことについて『文芸台湾』の一員である龍は「台湾新文学の伝統に拒んでいる」¹⁴とも評されている。物語論では、メタ物語的記号が、「語りかけている相手である聞き手の知識や素養を語り手がどう見ているかをあらわにする傾向がある」¹⁵という。土曜人の批判に対して反応する龍以外の「読者」が、「邂逅」の語りの「聞き手」にも当たる。龍瑛宗^ニ語り手は、「邂逅」の「聞き手」であれば、「土曜人の批判」を読む程の知識や素養を有しているはずだと、推定しているはずである。

土曜人の批判に対するこうした「読者」の反応を、作者の龍は知っているため、テキストでは、「もちろん、本人の劉石虎は知るよしもなかつた（200頁）」や「年がとるにつれて冷靜に考へてみると某

¹³ 土曜人（1937.5）「「普賢」「地中海」及び「パパイヤのある街」、『台湾新文学』2巻4号。

¹⁴ 朱家慧（2000）『兩個太陽下的台灣作家：龍瑛宗與呂赫若研究』、台南：台南市芸術中心、100頁。

¹⁵ ジェラルド・プリンス著、遠藤健一訳（1996）『物語論の位相—物語の形式と機能』、東京：松柏社、144頁。

氏の結論は間違つてゐなかつた（200頁）」と、道化的な自虐さを演出している。言い換えれば、「邂逅」におけるパロディは、土曜人や読者に対する弁明とも読み取れる。

ただし、日本語文学としての植民地文学の回復は、龍のパロディを外部圧力への反応と矮小化してはならず、植民地的擬態という観点から「新しい文化」＝日本・日本語を介した「近代化の焦燥」¹⁶を中心としたカテゴリーに置き換えて議論すべきである。

汽車が象徴する近代化に対し、「頭ならびに腹」の子僧のような下層階級が、奇跡的な列車の復旧により、「意気揚々と窓枠を叩きながら（402頁）」、列車を一人占めで「目的地へ向つて空虚のまま全速力で駆け出した（402頁）」と、有産階級の紳士の判断と行動を勝ち抜いていく。

一方、汽車に象徴される西洋の科学文化が既に流入している台湾において、「奇跡があらはれた」ことで、給仕から文豪に転身した劉石虎は、一見紳士より名声を手に入れ、出世したかのように見える。ところが、楊名声の台湾の無文化論に対して、劉は自ら「美德や謙譲」などの文化建設を実現してみせる以前に、科学文化の豪勢がすでに文豪「劉石虎の眼といはず、鼻といはず、口といはず、全身にふりかかつてきた」と、西洋の科学文化に対する東洋美德の敗北の現状を暗黙に認めるように描いている。

かつて随筆「汽車の中」で「汽車は現代の経済界に、重要にして缺くべからざる役割を演じてゐるが、単に経済界のみならず、また文化の運搬者である。如何に多くの文化が汽車によつて促進せられたことであらう。」¹⁷と述べている。メタ物語的記号が、「どうのよ
うに解釈すべきなのかという問いに対するテキスト自体の答え」¹⁸

¹⁶ 柳書琴は戦後の龍を論じた言葉だが、戦前もこの傾向が伺える。柳書琴（2003）「跨時代跨語作家的戦後初体験—龍瑛宗的現代性焦慮（1945-1947）」、『臺灣文學學報』第4期、台北：政治大学台湾文学研究所。

¹⁷ 龍瑛宗（1939.11）「汽車の中」『台湾鉄道』329号。但し、龍瑛宗著、陳萬益編、（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第五冊』、台南：国立台湾文学館、107頁より引用。

¹⁸ ジェラルド・プリンス著、遠藤健一訳（1996）『物語論の位相—物語の形式と

といえるならば、汽車によって象徴される近代化への諷刺を描く「頭ならびに腹」を模作することと、台湾文化の不完全さのパロディを実験したことによって、反語的に「邂逅」で台湾の文化の欠如・欠乏という問題提起をしている。

台湾にはいままで文化といふのがなかつたことは僕も認めます。しかし、問題は文化があるとか、ないとかといふことぢやなくて、文化がないからこそ、われわれが文化を創り上げようとするところにあるのです。 (204 頁)

先に述べたように、龍は土曜人と読者を強く意識しており、自身の経歴に言及しているだろう。その延長線で、上記の引用部は台湾文化の創造を知識人に呼びかけているとも解釈できよう。

以下では、龍が受容した文学者横光への批判を通して、龍がどのような新しき文化を唱えようとしていたかを詳しく論じてみたい。

3. 「ナポレオンと横光利一」に見る龍瑛宗の「ナポレオンと田虫」批判

龍は、「ナポレオンと横光利一」で横光の文体の変遷を三つの段階に分けて的確に論述している。横光文学の推移をよく観察したものだといえる。

まずは、『ナポレオンと田虫』は有名な『春は馬車に乗って』と共に、氏の新感覚派驍将時代の作品 (128 頁)¹⁹だと紹介し、次に「この作品を書いたときは、丁度、横光利一の『日本語との不逞極まる血戦時代』で全篇『光つた言葉』で覆はれてゐる (131 頁)」と横光の文体実験に言及した。ここで注意すべきなのは、1931 年 11 月に刊行した横光『書方草紙』の序文の「国語との不逞極まる血戦時

機能』、東京：松柏社、144 頁。

¹⁹龍瑛宗 (1943)『孤独な蠹魚』、盛興出版部に所収。但し、龍瑛宗著、陳萬益編 (2008)『龍瑛宗全集 (日本語版) 第四冊』、台南：国立台湾文学館、128 頁による。以下の「ナポレオンと横光利一」の引用は頁数のみ示す。

代」という表現における「国語」を龍が「日本語」と置き換えたことだ。ところが、龍は文体の表現より、ナポレオンの史実に関する内容を厳しく批判している。

歴史的考証を無視した歴史、事実の歪形は、辛うじて文芸作品を成立せしめ得たにしても、厳密な意味においてどうかと思はれる……つまり、歴史、事実の歪形は、芸術において可能ではあるか、歪形そのもののなかに、強烈な実証精神とレヤリズムがなければならぬ。（131頁）

ナポレオンに関する伝記を「読んでみない（127頁）」と告白する龍が、横光が歴史を歪めたと批判するのは、果たして適切な評価なのか。

高橋幸平「横光利一「ナポレオンと田虫」の材源と構成」によれば、横光は、「世界の英雄の中では、自分は最もナポレオンに造詣の深かった」²⁰と自負しているぐらい中学時代から関連書を買集めていた。また、龍が推測したスタンダールによる評伝ではなく、横光が主に参照したと推測されるナポレオン評伝は、千頭清臣『那翁大帝』（1917.4、博文館）と、奈翁研究会編『大奈翁伝』1919.6、松本商会）という二冊であることをも指摘している²¹。

そして高橋は、「ナポレオンと田虫」（『文芸時代』、1926.1）を執筆するにあたって、横光は以下の3点を改編したと分析している。

まず、トゥーロン攻囲戦で一兵卒からナポレオンに皮膚病が伝染したという逸話が、「ナポレオンと田虫」では、ナポレオン出世のスタートとなったロジの戦い出来事となっている。次に、第一統領になる頃までには完治していたとされるナポレオンの疥癬が、作品ではその十三年後であるロシア遠征まで悪化し続けている。

²⁰高橋幸平（2012）「横光利一「ナポレオンと田虫」の材源と構成」、『国語国文』81巻1号、京都：京都大学国語学国文学研究室、2頁。

²¹高橋幸平（2012）「横光利一「ナポレオンと田虫」の材源と構成」、『国語国文』81巻1号、京都：京都大学国語学国文学研究室、2-3頁。

三つ目に、ナポレオンの皮膚病を嫌忌する人物が前妻ジョセフィーヌではなく新皇后ルイザとなっている。そして最後は、ナポレオンが患った皮膚病が疥癬ではなく田虫になっている。²²

では、その改編の意図はどこにあるか。黒田大河は「ナポレオンと田虫」一歴史である「かのやうに」では、この作品は「蠅」のように実験的な構図を受け継いだ上に、現実的な歴史への接近を試みたものだと述べている²³。また、疥癬よりも田虫の方が「平民の病気を持つ皇帝ナポレオン」²⁴を形作りやすく、「その自尊心こそが〈歴史〉を動かしている」²⁵と評している。

ところが、龍は「横光利一にあつては、歴史はナポレオンによつて造られてゐる。ところがナポレオンは歴史を造るやうに見えながら実際は、歴史がナポレオンを造つてゐるのだ」と述べている。ここで、龍があくまでもリアリズム的な事実を理想としていることが分かる。

ところが、高橋幸平と黒田大河の研究を合わせてみれば、小説「ナポレオンと田虫」はむしろ歴史伝記に忠実で、構図の効果を求めることに応じた改編に留まっている。その改編の理由としては、伴悦『横光利一文学の生成』が指摘した、横光は「階級文学を横目でみながら十九世紀における『貴族礼賛の慣習』の『崩壊』に焦点をあわせ、その恰好の材料として『平民ナポレオン』が浮かびあが」²⁶らせたことにある。

田虫が歴史や平民の象徴などとして捉えるならば、龍がいう「歴史がナポレオンを造つてゐる」ことがまさに横光の趣旨だともいえ

²²高橋幸平（2012）「横光利一「ナポレオンと田虫」の材源と構成」、『国語国文』81巻1号、京都：京都大学国語学国文学研究室、11-12頁。

²³黒田大河（2006）「「ナポレオンと田虫」一歴史である「かのやうに」」、石田仁志・渋谷香織・中村三春編、『横光利一の文学世界』、東京：翰林書房、78頁。

²⁴黒田大河（2006）「「ナポレオンと田虫」一歴史である「かのやうに」」、石田仁志・渋谷香織・中村三春編、『横光利一の文学世界』、東京：翰林書房、84頁。

²⁵黒田大河（2006）「「ナポレオンと田虫」一歴史である「かのやうに」」、石田仁志・渋谷香織・中村三春編、『横光利一の文学世界』、東京：翰林書房、84頁。

²⁶伴悦（1999）『横光利一文学の生成』、東京：おうふう、66頁。

るはずである。

しかし、龍は「英雄を一應、地べたへ引づり下さうとする横光利一の意圖は正しい(131頁)」と言って、「ナポレオンは歴史を造る」という英雄伝説を批判しつつも、この田虫とナポレオンの対比構図を好ましく思わずに、「歴史、事実の歪形」だと述べるところからは、龍瑛宗は、観念的な構成、象徴的な構図よりも、歴史に忠実なリアリズムを重視していることが推知できる。

それでは、龍瑛宗の文学観における歴史の扱い方はいかなるものかを考えてみたい。「文學の在り方」で、龍は「文学といふものは、人間集団であるところの社会生活ならびに風俗といふ具象性をもつて、生ける歴史の姿を描くのである」²⁷と唱え、また、「戦時下の文学」では「現実といふものが文学の基盤である」²⁸と主張している。

龍は横光の表現の観念的・象徴的な構図を「芸術において可能ではある」と認めつつも、それをリアリズムを優先させる視点に立ち、批判する姿勢をとっている。

まとめていえば、横光の「ナポレオンと田虫」がナポレオン伝のパロディと言えるならば、龍瑛宗の「邂逅」もまた横光の「頭ならびに腹」のパロディだと言える。「邂逅」が横光の「頭ならびに腹」を継承したのは、科学的近代化への反応としての有効性を龍が認めただためであろう。但し、両者のパロディにおける、「歴史・事実」の捉え方には、上記の龍の文学における歴史観により、相違がある。龍瑛宗が「邂逅」で自らの分身＝劉が文豪に持ち上げられたことに皮肉を感じたのは、恐らくナポレオンに感じたのと同様に「歴史が劉石虎を造つてゐる」と考えたためである。そして科学文化という「歴史法則(132頁)」の洪流の前に立ち竦んで、焦燥感や無力感を感じてしまうように描いたのだろう。

²⁷龍瑛宗(1943.10)「文學の在り方」『台湾婦人界』10巻10号。但し、龍瑛宗著、陳萬益編(2008)『龍瑛宗全集(日本語版)第四冊』、台南：国立台湾文学館、119頁による。

²⁸龍瑛宗(1944.8)「戦時下の文学」『台湾文芸』1巻4号。但し、龍瑛宗著、陳萬益編(2008)『龍瑛宗全集(日本語版)第五冊』、台南：国立台湾文学館、163頁による。

4. 龍の文学観および横光の「近代の超克」への反響

龍は「ナポレオンと横光利一」でさらに次のように批判している。

横光利一が「逆立ちした観念」で、この作品のなかの諸人物を彫刻せんとしたとき、人物の肉は落ち、眞実は逃亡し、横光利一のソフィステイクーションだけが、彼の逞しい装飾きらびやかな文章に支へられて横たへてゐるのだ。

これと、さらに龍が「文学襍記帖」で批判したものと合わせて考えてみたい。

アンドレ・ジイド文学は、知性文学の驍將とでも云へるであらう。「贗金づくり」を読むと彼は手品師のやうに作品を構成してゐる。……アンドレ・ジイドの文学には、生活の肉体がない。幻影だけだ²⁹。

実際、横光もジイドを模倣した一人である。小田桐弘子の研究によれば、横光の親しんだ外国作家の上位三位に入っている³⁰。また、横光の『純粹小説論』や『機械』はジイドの『贗金づくり』に影響を受けたともいわれている³¹。龍がリアリズム文学から掛け離れた両者の構図先行の文体を好ましく思わなかったことが分かる。

それでは、龍瑛宗が批判した「逆立ちした観念」的な文学とは何かを「近代の超克」と「文学観」という二つの面から検討したい。第2節で、横光の文体の第1段階、「新感覚派時代」という段階が提起されたが、続いて、第二段階の「新心理主義時代」が論じられ、

²⁹龍瑛宗（1941. 9. 30～10. 1）「文学襍記帖」『台湾日日新報』。但し、龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第五冊』、台南：国立台湾文学館、138頁による。

³⁰小田桐弘子（1980）『横光利一—比較文学的研究』東京：南窓社、150—158頁。

³¹井上謙ほか編（2002）『横光利一事典』、東京：おうふう、19頁。

「横光利一は賢明にも、これを悟つて脱出を試み「機械」なぞを経て「紋章」に至り、また一つの頂点を築いてゐる（132頁）」と的確に横光の文体変遷を捉えている。さらに、以下のように、最後の第三段階の文体についても、現在の横光利一研究と一致している。

横光利一は「日本を観るため」に渡欧、フランスにゆき、帰朝してから「厨房日記」を書いてまた脱皮作業を行ひ、最近、「旅愁」を書いて観念的なものへ殺到してゐる。（132頁）

十重田裕一「「旅愁」一さまよえる本文」によれば、この小説は「一九三七年四月から「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に連載された本文と、その後これを引き継いで「文藝春秋」「文学界」「人間」に断続的に連載された本文」³²からなる。また、戦前版単行本収録本文は「改造社刊行の『旅愁第一篇』（一九四〇・六）『旅愁第二篇』（一九四〇・七）『旅愁第三篇』一九四二・二）」³³となる。ここで分かるのは、龍が「ナポレオンと横光利一」を書いた1940年10月からすれば、第二編以降は未見となることである。

それでは、横光利一は具体的にどう「日本を観る」のか。以下では戦時下（1937 - 1945年）横光の文学観に大きな影響を齎した二つの事件について述べたい。

龍瑛宗が「ナポレオンと横光利一」を書いた1940年より2年後のことだが、座談会「近代の超克」は1942年7月23・24日に『文学界』、日本ロマン派、京都学派などの知識人によって開催された。河田和子によると、戦時下、横光は〈近代の超克〉論者と同じ志向を持っていたが、「〈日本的なもの〉＝古神道が思案されており、科学に対するそうした横光の姿勢は、他の〈近代の超克〉論者と異なっ

³²十重田裕一（2006）「「旅愁」一さまよえる本文」、『横光利一の文学世界』、東京：翰林書房、130頁。

³³十重田裕一（2006）「「旅愁」一さまよえる本文」、『横光利一の文学世界』、東京：翰林書房、130頁。

ていた」³⁴と論じている。

子安宣邦は『「近代の超克」とは何か』で「対米英戦の開戦が、日本人に己れの歴史心理的な鬱屈の要因を「近代」として対象化させ、その克服の言辞を可能にさせたのである」³⁵とこの座談会の心理を解釈している。以上から横光は直接参加していないが、日本を中心とした「アジア的近代」の構想を共有していることは推測できる。

同年11月4、5日に開催された第一回目の大東亜文学者大会の会議でも、横光は「大東亜精神の強化普及」という議題で、「大東亜各国の文学者諸氏の過去の本当の苦しみは、科学との闘争であつた」（『日本学芸新聞』143号、1942.11.15）」と「近代の超克」に同調する発言をしていた。

一方、龍瑛宗も類似する文学観を述べている。「文學とは何か(下)」では、「科学は物質の位置を換るのであるが、文学は人間精神の位置を換させるものである」³⁶という。また、「道義文化の優位」では、「近代の終焉といへるならば、それは科学文化の行詰り若しくは破綻を指すものであると思ふが、今次における戦ひも科学文化を克超することによつて、東洋本来の道義文化を確立する」³⁷ことを唱え、「新しき文化の樹立」では、「いまや日本の主唱のもとに、……米英文化を否定して、新しいアジア文化の復興」³⁸を宣言していた。

二人とも、西洋の科学物質文化を超克するために、東洋の、または精神的な文化や文学を対抗項として取り上げていた。東洋の精神文明に回帰する新文化を龍が唱えたのは、王惠珍が『戦鼓聲中的殖

³⁴河田和子（2009）『戦時下の文学と日本的なもの—横光利一と保田與重郎』、福岡：花書院、112頁。

³⁵子安宣邦（2008）「なぜ「近代」とその超克なのか「近代の超克」と三つの座談会」、子安宣邦『「近代の超克」とは何か』、東京：青土社、30頁。

³⁶龍瑛宗（1941.7.10）「文學とは何か（下）」『臺灣日日新報』。但し、龍瑛宗著、陳萬益編、2008.4、『龍瑛宗全集（日本語版）第四冊』、台南、国立台湾文学館、95頁による。

³⁷龍瑛宗（1943.1）「道義文化の優位」『台湾新文学』3巻1号。但し、龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第四冊』、台南：国立台湾文学館、104頁による。

³⁸龍瑛宗（1942.12）「新しき文化の樹立」『文芸台湾』5巻3号。但し、龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第五冊』、台南：国立台湾文学館、153頁による。

民地書寫 作家龍瑛宗的文學軌跡』³⁹で指摘した情報課などのプロパガンダ的な内容によるもののほか、ある程度龍が個人的に考えている「新しい文化の建設」も吐露されているはずである。

ところが、この新しい文化とは、西洋の機械・科学文明が代表する「近代」と対抗するものである。

一方、龍はかつて、「横光利一は「日本を観るため」に渡歐、フランスにゆき、帰朝してから「厨房日記」を書いてまた脱皮作業を行ひ、最近、「旅愁」を書いて観念的なものへ殺到してゐる。」⁴⁰と評している。それなら、その内容を表現した「旅愁」を龍がなぜ、「観念的なもの」だと評したのか。

館下徹志によれば、横光は「旅愁」で「多様性を内に抱えるはずの〈西洋〉を均質な〈他者〉として想定し、さらに〈日本〉も同様に単一化することによって、〈日本対西洋〉という二項対立の図式」⁴¹を仮構しているという。この簡略化された図式を龍は「観念的」と批判したのだろう。

ところが、龍が近代の超克論を横光と共有していても、龍が「邂逅」で提唱しようとした文学を通して新しい文化を創りあげることからは、プロパガンダ以上の意図が伺える。

「文學とは何か（下）」で龍は、「そして社会生活の獣性をあばき出すことによつて、人々の反省を求め、崇高なる行為を描いて、人々の品性を高めるのである。そして前者のやうな否定の文学は、リヤリズムの文学に、後者のやうな肯定の文学はロマンチズムの文学に多く見出せるのであるが、ここでは文学の二大潮流たるリヤリズムとロマンチズムについては述べないことにする。」⁴²

これを、「歴史、事実の歪形は、芸術において可能ではあるか、歪

³⁹王惠珍（2014）『戦鼓聲中の殖民地書寫 作家龍瑛宗的文學軌跡』、台北：台大出版中心、240頁。

⁴⁰龍瑛宗（1940.10脱稿、1943.12刊行）「ナポレオンと横光利一」『孤独な蠹魚』台湾文庫盛興出版部。但し、龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第四冊』、台南：国立台湾文学館、132頁。

⁴¹館下徹志（2011）「横光利一—旅愁—における現代性としての〈非合理〉——他者化という方法の互換性」、『横光利一研究』第9号、京都：横光利一文学会、32頁。

⁴²但し、龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第四冊』、台南：国立台湾文学館、95頁による。

形そのもののなかに、強烈な実証精神とレヤリズムがなければならぬ。」と対照すれば、まさに台湾の文壇を論じる「南方の作家たち」での「リヤリズム文学一色に塗り潰すことも寂しいことと思ふ。……ロマソチジズム文学も、人間の精神を高揚させるものである」⁴³という龍の抒情を反映している。作品のロマンチズムとしての価値を、社会主義的リアリズムとしての価値より、龍は重視している。

これについて、蔣淑貞が龍の「作家について」での「ランボオの文学も、太宰治の文学も美しい文学に違ひないが、しかし、文学の本道は、やはり、ゴオゴリの「外套」であり、トルストイの「アンナ、カレニーナ」」⁴⁴を論拠に、龍瑛宗はロマンチズムに耽る作家よりも、リアリズム小説家を好むと論じている⁴⁵。

「中村哲氏龍瑛宗氏對談會」では、「私小説から本格的小説客観小説を書くのが文学の本道だと思ひます」⁴⁶といい、「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」では「今後の日本文学が私小説よりも、客観的文学に立向ふ傾向を伺ふ事が出来、日本文学の一大発展だと思ひます」⁴⁷と述べている。

「私小説自体においては、多くの問題をはらんでゐよう」⁴⁸と思っている龍は「邂逅」で、メタ言説と「頭ならびに腹」における象徴の構図の模倣による構成を見せたのは、自己言及する小説「邂逅」を私小説と混同される恐れを避けようとするためだろう。つまり、

⁴³ 龍瑛宗（1942.3）「南方の作家たち」『文芸台湾』3巻6号。但し、龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第四冊』、台南：国立台湾文学館、99頁。

⁴⁴ 龍瑛宗（1941.1）「作家について」、『台湾芸術』2巻1号。但し、龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第四冊』、台南：国立台湾文学館、82頁。

⁴⁵ 蔣淑貞（2011）「龍瑛宗的「南方」觀」、『戰鼓聲中的歌者 龍瑛宗及其同時代東亞作家論文集』、新竹：清華大台湾文学研究所、51頁。

⁴⁶ 龍瑛宗（1943.1）「中村哲氏龍瑛宗氏對談會」『台湾芸術』4巻1号。龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第六冊』、台南：国立台湾文学館、111頁。

⁴⁷ 龍瑛宗ら（1942.11）「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」『台湾芸術』3巻11号。龍瑛宗著、陳萬益編、2008.4、『龍瑛宗全集（日本語版）第六冊』、台南、国立台湾文学館、96-97頁。

⁴⁸ 龍瑛宗（1943.12）「回顧と内省」『台湾芸術』4巻12号。龍瑛宗著、陳萬益編（2008）『龍瑛宗全集（日本語版）第四冊』、台南：国立台湾文学館、125頁。

「本格的客観的小説」とは、現実と歴史に忠実であり、私小説以上に構図を練りつつも、ロマンチズム精神を有するものが龍瑛宗の理想である。

台湾人としての立場性^{ボジショナリテイ}により生み出された「邂逅」は、「ナポレオンと横光利一」と微妙に異なる向きの実践を形成し、その臨界点が刻む痕跡では、龍が嘆息するところの「植民地日本語作家」が成立しその限界が定められたのである。

張修愼は「近代の超克」座談会の本質はその段階での日本国民性（民族性）の創出という役割を果たした⁴⁹と指摘している。それならば、私小説ではなく、リアリズム文学によって新しい文化を作り出そうとするものは、台湾風土ならではの本島人の文学であり、必ずしも「日本国民性」に包摂されていない。さらに、張修愼は「1940年代の文学思潮中の傾向である「日本文化の回帰」から「近代の超克」に潜んでいるものと台湾の「郷土文学」に現れた意識には相似点がある⁵⁰と鋭い分析を行っている。ここからいえるのは、龍が守ろうとしたのは、同じ民族主義ではあるが、内地人と本島人は民族を異にしていることを前提としていたのである。

戦前、龍文学は閩南系作家を中心とする「日本語台湾人作家」からその周縁に位置づけられていた。ところが、龍文学は楊逵と推定されている土曜人などの閩南系作家と、横光利一といった日本人作家とダイナミックな応酬を行い、リアリズムや文学の芸術表現について、相対的な自立性を表明している。それこそが、龍の批評的営為に占める、龍の理想的な「新文化建設」の意味であろう。

5. おわりに

以上、「邂逅」における横光「頭ならびに腹」のパロディを分析し、「ナポレオンと横光利一」などの随筆に見る龍瑛宗の文学観を明ら

⁴⁹張修愼（2006）「日本の「近代の超克」思想と戦時下台湾知識人の諸相」、『台大日本語文研究』第11号、台北：台湾大学日本語文学系、35頁。

⁵⁰張修愼（2006）「日本の「近代の超克」思想と戦時下台湾知識人の諸相」、『台大日本語文研究』第11号、台北：台湾大学日本語文学系、35頁。

かにした。

また、龍がいかに創造的に日本語及び日本文学を受容し、民族的主体性を構築したのかを、メタ的記号の分析を通して検討した。

そして大東亜共栄圏の建設に共振する「近代の超克」という戦時下の言説に着目し、「頭ならびに腹」の模倣や、「ナポレオンと横光利一」での横光批判を通して、龍の理想的な小説のあり方を論じた。メタ小説における作者と作中人物の一体化が、「邂逅」をリアリズム小説として成立させても、その「汽車」と近代的科学文明との換喩表現もまた、リアリズムとしての成立を曖昧にしたことを指摘した。

こうした「邂逅」に対するリアリズム小説と象徴的構図を含む小説との解釈の異なる可能性など、社会主義的リアリズムで括られている日本統治期台湾新文学においては、リアリズムの視角だけでは解釈しきれないテキストとして、さらなる植民地文学のアンビヴァレンスに帰結できよう。

*2名の査読者から多数の貴重なご助言をいただいた。なお、本成果の一部は台湾科技部「學術専門書執筆計画（MOST 106-2410-H-160-005-）」の助成を受けたものです。ここに記して合わせて感謝の意を表したい。

参考文献

日本語（五十音順）

井上謙ほか編（2002）『横光利一事典』東京：おうふう。

糸井道浩・高橋亨編（1992）『物語の方法—語りの意味論』、京都：世界思想社。

石田仁志・渋谷香織・中村三春編（2006）『横光利一の文学世界』、東京：翰林書房。

小田桐弘子（1980）『横光利一—比較文学的研究』、東京：南窓社。

河田和子（2009）『戦時下の文学と日本的なもの—横光利一と保田與重郎』、福岡：花書院。

黒田大河（2006）「「ナポレオンと田虫」—歴史である「かのやうに」」、

- 『横光利一の文学世界』、東京：翰林書房。
- 子安宣邦（2008）『「近代の超克」とは何か』、東京：青土社。
- 館下徹志（2011）「横光利一―旅愁―における現代性としての〈非合理〉―他者化という方法の互換性」、『横光利一研究』第9号、京都：横光利一文学会。
- 高橋幸平（2012）「横光利一「ナポレオンと田虫」の材源と構成」、『国語国文』81巻1号、京都：京都大学国語学国文学研究室。
- 張修慎（2006）「日本の「近代の超克」思想と戦時下台湾知識人の諸相」、『台大日本語文研究』第11号、台北：台湾大学日本語文学系。
- 十重田裕一（2006）「「旅愁」―さまよえる本文」、『横光利一の文学世界』、東京：翰林書房。
- 伴悦（1999）『横光利一文学の生成』、東京：おうふう。
- 藤井貞和（2004）『物語理論講義』、東京大学出版会。
- ジェラルド・プリンス著、遠藤健一訳（1996）『物語論の位相―物語の形式と機能』、東京：松柏社。

中国語（画数順）

- 王惠珍（2014）『戦鼓聲中的殖民地書寫 作家龍瑛宗的文學軌跡』、台北：台大出版中心。
- 朱家慧（2000）『兩個太陽下的台灣作家：龍瑛宗與呂赫若研究』、台南：台南市芸術中心。
- 柳書琴（2003）「跨時代跨語作家的戦後初體驗―龍瑛宗の現代性焦慮（1945-1947）」、『臺灣文學學報』第4期、台北：國立政治大學台灣文學研究所。
- 翁翠萍、「台灣客籍作家龍瑛宗全集日文卷新書發表」、『大紀元』、2008.6.27。
<http://www.epochtimes.com/b5/8/6/27/n2171122.htm>（2018.08.16 確認）
- 張恆豪編（1991）『龍瑛宗集』、台北：前衛。

- 陳芳明（2011）『台灣新文學史上』、台北：聯經。
- 陳建忠（2004）「尋找熱帶的椅子—論龍瑛宗一九四〇年的小說」、『日據時期台灣作家論—現代性本土性殖民性』、台北：五南圖書。
- 葉石濤（1987）「論龍瑛宗的客家情節」、『杜甫在長安』、台北：聯經。
- 蔣淑貞（2011）「龍瑛宗的「南方」觀」、『戰鼓聲中的歌者 龍瑛宗及其同時代東亞作家論文集』、新竹：清華大學台灣文學所。
- 藤井省三著、張季琳譯（2004）「「大東亞戰爭」時期的台灣皇民文學」、『台灣文學這一百年』、台北：麥田。
- 羅成純（1991）「龍瑛宗研究」、龍瑛宗著、張恆豪編『龍瑛宗集』、台北：前衛。